

(19)



JAPANESE PATENT OFFICE

## PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11) Publication number: **2003231804 A**(43) Date of publication of application: **19.08.03**

(51) Int. Cl.

**C08L 69/00**  
**C08J 5/00**  
**C08K 5/10**  
**C08K 5/13**  
**C08K 5/1539**  
**C08K 5/3475**  
**C08K 5/524**  
**G02C 7/02**

(21) Application number: **2002033942**(22) Date of filing: **12.02.02**(71) Applicant: **MITSUBISHI ENGINEERING  
PLASTICS CORP**(72) Inventor: **HIRAI YASUHIRO  
YAMAZAKI TOSHIHIKO  
NISHIBAYASHI YUTAKA**(54) **POLYCARBONATE RESIN COMPOSITION AND  
MOLDING COMPOSED OF THE COMPOSITION**

(57) Abstract:

**PROBLEM TO BE SOLVED:** To obtain an aromatic polycarbonate resin composition having excellent ultraviolet absorbing ability, weather resistance, mold stain resistance, impact resistance, heat resistance, color tone stability and transparency.

**SOLUTION:** The aromatic polycarbonate resin composition is obtained by mixing (a) 100 parts wt. of

an aromatic polycarbonate resin with (b) 0.1-1 part wt. of a benzotriazole-based ultraviolet light absorber having  $\approx 350$  nm maximum absorption wavelength, (c) 0.003-1 part wt. of a benzofurano-2-one type compound, (d) 0.01-2 parts wt. of a phosphite-based stabilizer and (e) 0.01-2 parts wt. of a phenol-based antioxidant. The aromatic polycarbonate resin has  $\approx 300$  ppm terminal hydroxy group concentration and  $\leq 500$  ppm remaining monomer amount.

COPYRIGHT: (C)2003,JPO

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公開番号  
特開2003-231804  
(P2003-231804A)

(43)公開日 平成15年8月19日(2003.8.19)

(51)Int.Cl. <sup>7</sup>	識別記号	F I	テ-マ-コ-ト*(参考)
C 0 8 L 69/00		C 0 8 L 69/00	4 F 0 7 1
C 0 8 J 5/00	C F D	C 0 8 J 5/00	C F D 4 J 0 0 2
C 0 8 K 5/10		C 0 8 K 5/10	
5/13		5/13	
5/1539		5/1539	
審査請求 未請求 請求項の数10 O L (全 13 頁) 最終頁に続く			

(21)出願番号 特願2002-33942(P2002-33942)

(22)出願日 平成14年2月12日(2002.2.12)

(71)出願人 594137579  
三菱エンジニアリングプラスチックス株式  
会社  
東京都中央区京橋一丁目1番1号  
(72)発明者 平井 康裕  
神奈川県平塚市東八幡5丁目6番2号 三  
菱エンジニアリングプラスチックス株式会  
社技術センター内  
(74)代理人 100077573  
弁理士 細井 勇

最終頁に続く

(54)【発明の名称】 ポリカーボネート樹脂組成物及びその組成物からなる成形品

(57)【要約】

【目的】紫外線吸収能および耐候性、金型汚染性に優れ、耐衝撃性、耐熱性、色調安定性、透明性に優れた芳香族ポリカーボネート樹脂組成物を提供することにある。

【解決手段】(a)芳香族ポリカーボネート樹脂100重量部に対して、(b)最大吸収波長が350nm以上であるベンゾトリアゾール系紫外線吸収剤0.1~1重量部、(c)ベンゾフラノ-2-オン型化合物0.003~1重量部、(d)亜リン酸エステル系安定剤0.01~2重量部、(e)フェノール系抗酸化剤0.01~2重量部、を配合してなる芳香族ポリカーボネート樹脂組成物であって、上記芳香族ポリカーボネート樹脂が、その末端水酸基濃度が300ppm以上であり、かつ、残存モノマー量が500ppm以下のものであることを特徴とする芳香族ポリカーボネート樹脂組成物に関する。

## 【特許請求の範囲】

【請求項 1】 (a) 芳香族ポリカーボネート樹脂 100 重量部に対して、

(b) 最大吸収波長が 350 nm 以上であるベンゾトリアゾール系紫外線吸収剤 0.1～1 重量部、

(c) ベンゾフラノ-2-オン型化合物 0.003～1 重量部、

(d) 亜リン酸エステル系安定剤 0.01～2 重量部、

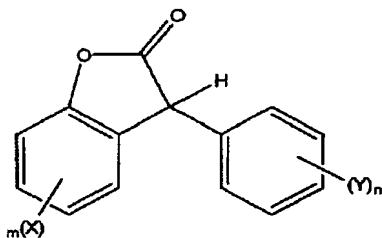
(e) フェノール系抗酸化剤 0.01～2 重量部、

を配合してなる芳香族ポリカーボネート樹脂組成物であって、上記芳香族ポリカーボネート樹脂が、その末端水酸基濃度が 300 ppm 以上であり、かつ、残存モノマー量が 500 ppm 以下のものであることを特徴とする芳香族ポリカーボネート樹脂組成物。

【請求項 2】 芳香族ポリカーボネート樹脂 100 重量部に対して、さらに (f) 離型剤 0.01～1 重量部を配合してなることを特徴とする請求項 1 記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物。

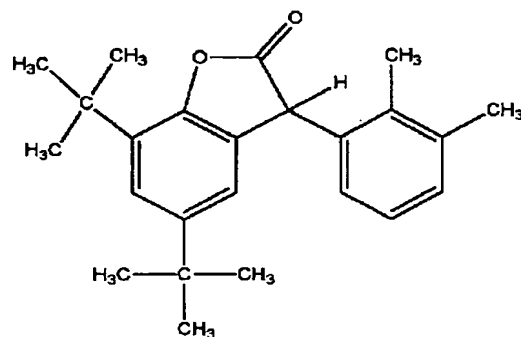
【請求項 3】 ベンゾフラノ-2-オン型化合物 (c) が下記一般式 (1) で表される化合物であることを特徴とする請求項 1 または請求項 2 記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物。

## 【化 1】



(1)

\*



(3)

【請求項 5】 亜リン酸エステル系安定剤 (d) が、下記一般式 (4) 及び／または (5) に示される化合物であることを特徴とする請求項 1 ないし請求項 4 記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物。

## 【化 4】

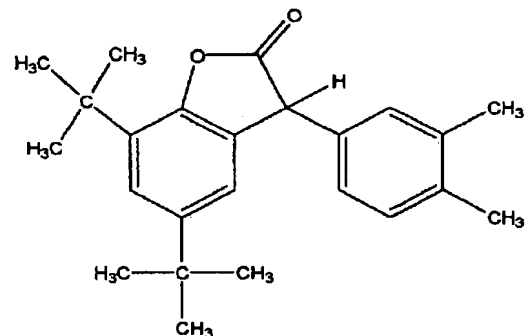


(R<sup>1</sup> は、置換基を有してもよい炭素数 1～20 の脂肪族炭化水素基、脂環族炭化水素基または芳香族炭化水素基を表す)

\* (式中、m は 0～4、n は 0～5 の整数であり、X、Y は酸素原子、窒素原子、硫黄原子のいずれか 1 種または 2 種以上を含んでいてもよい炭素数 1～18 の脂肪族炭化水素基、脂環族炭化水素基または芳香族炭化水素基を表し、X、Y は同一であっても異なっても良い)

【請求項 4】 ベンゾフラノ-2-オン型化合物 (c) が、下記構造式 (2) もしくは (3) で表される化合物またはそれらの混合物であることを特徴とする請求項 1 ないし請求項 3 のいずれかに記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物。

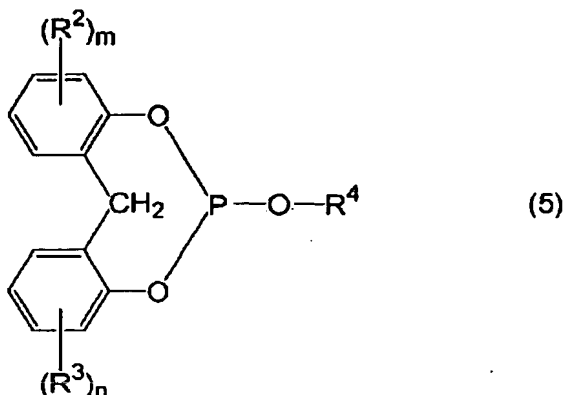
## 【化 2】



(2)

## 【化 3】

## 【化 5】



(5)

( $R^2 \sim R^4$ は、それぞれ置換基を有してもよい炭素数1～20の脂肪族炭化水素基、脂環族炭化水素基または芳香族炭化水素基を表し、 $m$ 及び $n$ は、それぞれ0～4の整数を表す。)

【請求項6】離型剤(f)が、飽和脂肪族カルボン酸エステル化合物であることを特徴とする請求項2ないし請求項5のいずれかに記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物。

【請求項7】芳香族ポリカーボネート樹脂(a)が、芳香族ジヒドロキシ化合物と炭酸ジエステルとのエステル交換反応により製造された芳香族ポリカーボネート樹脂であることを特徴とする請求項1ないし請求項6のいずれかに記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物。

【請求項8】厚み3mmにおける400nmの光線透過率が1%以下であることを特徴とする請求項1ないし請求項7のいずれかに記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物。

【請求項9】請求項1ないし請求項8のいずれか1項に記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物より製造されたものであることを特徴とする成形品。

【請求項10】請求項1ないし請求項9のいずれか1項に記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物から製造されたものであることを特徴とするメガネレンズ。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、芳香族ポリカーボネート樹脂組成物に関する。詳しくは、紫外線吸収能及び耐候性、耐加水分解性に優れ、耐衝撃性、耐熱性、色調安定性、透明性に優れた芳香族ポリカーボネート樹脂組成物、及び該組成物から得られる成形品、特に該組成物から製造されるメガネレンズに関する。

【0002】

【従来の技術】芳香族ポリカーボネート樹脂は、強度、剛性が大きく、また耐摩擦磨耗性が優れているので、例えば、自動車部品、各種精密機械部品等に広く用いられている。しかしながら、芳香族ポリカーボネート樹脂は耐候性が十分ではなく、例えば、屋外での使用または蛍光灯照射下での室内使用においては、製品の変色あるいは強度の低下により使用が制限されていた。このため、

従来から種々の光安定剤が単独であるいは数種組み合わせられており、特にベンゾトリアゾール系紫外線吸収剤はその効果が比較的大きいので一般に用いられている。

【0003】特開平62-146951号公報及び特開平1-165419号公報にはポリカーボネート樹脂と、メチレンビス(ベンゾトリアゾール)化合物からなる組成物について開示されており、特開平9-291205号公報にはポリカーボネート樹脂とベンゾトリアゾリルフェノール基を2個有する紫外線吸収剤よりなる樹脂組成物より形成されたメガネレンズについて記載されている。しかしながら、用いられている紫外線吸収剤は吸収極大が350nm以下であることから、波長400nm以下における紫外線吸収能が不十分である。また、これらの公報に記載の組成物に関して耐加水分解性についてはなんら言及されていない。

【0004】また、特開平9-263694号公報にはポリカーボネート樹脂組成物に、波長300～345nmに吸収極大を有する紫外線吸収剤0.05～0.5重量部、及び波長346～400nmに吸収極大を有する紫外線吸収剤0.01～0.3重量部を添加してなる樹脂組成物より形成されたメガネレンズについて記載されている。しかしながら、公報の記載特に実施例によると、後者の紫外線吸収剤の添加量が少ないため、この樹脂組成物においても400nm以下における紫外線吸収能は不十分である。また、この発明においても耐加水分解性についてはなんら言及されていない。

【0005】

【発明が解決しようとする課題】本発明の目的は、紫外線吸収能及び耐候性、耐加水分解性に優れ、耐衝撃性、耐熱性、色調安定性、透明性に優れた芳香族ポリカーボネート樹脂組成物を提供することにある。

【0006】

【課題を解決するための手段】本発明は上記の問題を解決するためになされたものであり、その要旨は、

(1) (a) 芳香族ポリカーボネート樹脂100重量部に対して、(b) 最大吸収波長が350nm以上であるベンゾトリアゾール系紫外線吸収剤0.1～1重量部、

(c) ベンゾフラノ-2-オン型化合物0.003～1重量部、(d) 亜リン酸エステル系安定剤0.01～2重量部、(e) フェノール系抗酸化剤0.01～2重量部を配合してなることを芳香族ポリカーボネート樹脂組成物であって、上記芳香族ポリカーボネート樹脂が、その末端水酸基濃度が300ppm以上であり、かつ、残存モノマー量が500ppm以下のものであることを特徴とする芳香族ポリカーボネート樹脂組成物に関する。

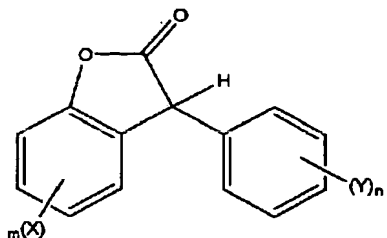
【0007】また、(2) 本発明は、芳香族ポリカーボネート樹脂100重量部に対して、さらに(f) 離型剤を0.01～1重量部を配合してなることを特徴とする上記(1) 記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物に

関する。

【0008】(3) ベンゾフラノ-2-オン型化合物(c)が、下記一般式(1)で表される化合物であることを特徴とする上記(1)または(2)記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物に関する。

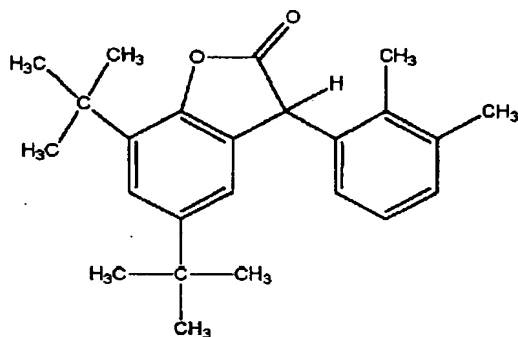
【0009】

【化6】



(1)

(式中、mは0～4、nは0～5の整数であり、X、Yは酸素原子、窒素原子、硫黄原子のいずれか1種または2種以上を含んでもよい炭素数1～18の脂肪族炭化水素基、脂環族炭化水素基または芳香族炭化水素基を表し、X、Yは同一であっても異なっても良い) \*

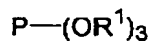


(3)

【0013】(5) 亜リン酸エステル系安定剤(d)が、下記一般式(4)及び/または(5)に示される化合物であることを特徴とする上記(1)ないし(4)のいずれかに記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物に関する。

【0014】

【化9】

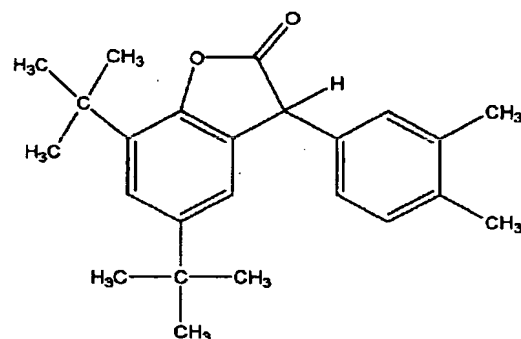


(4)

(R<sup>1</sup>は、置換基を有してもよい炭素数1～20の脂肪族炭化水素基、脂環族炭化水素基または芳香族炭化水素基を表す)

【0015】

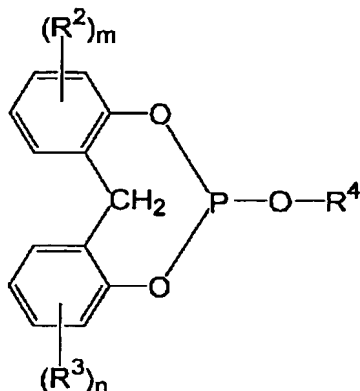
【化10】



(2)

【0012】

【化8】



(5)

(R<sup>2</sup>～R<sup>4</sup>は、それぞれ置換基を有してもよい炭素数1～20の脂肪族炭化水素基、脂環族炭化水素基または芳香族炭化水素基を表し、m及びnは、それぞれ0～4の整数を表す。)

【0016】(6) 離型剤(f)が、飽和脂肪族カルボン酸エステル化合物であることを特徴とする上記(2)ないし(5)のいずれかに記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物に関する。

【0017】また(7) 芳香族ポリカーボネート樹脂

(a)が、芳香族ジヒドロキシ化合物と炭酸ジエステルと

のエステル交換反応により製造された芳香族ポリカーボネート樹脂であることを特徴とする上記(1)ないし

(6)のいずれかに記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物に関する。

【0018】また(8)厚み3mmにおける400nmの光線透過率が1%以下であることを特徴とする(1)ないし(7)のいずれかに記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物に関する。

【0019】(9)さらに本発明は、上記(1)ないし(8)のいずれか1項に記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物より製造されたものであることを特徴とする成形品に関する。

【0020】(10)さらには本発明は、上記(1)ないし(9)のいずれか1項に記載の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物から製造されたものであることを特徴とするメガネレンズに関する。

#### 【0021】

【発明の実施の形態】以下、本発明を詳細に説明する。芳香族ポリカーボネート樹脂(a)は、原料として芳香族ジヒドロキシ化合物類と炭酸結合を導入し得る化合物類を用い、従来から知られている、界面重縮合法、エステル交換法などによって製造することができる。このうち、エステル交換法によって製造するのが好ましい。

【0022】芳香族ジヒドロキシ化合物としては、具体的には、例えば、2, 2-ビス(4-ヒドロキシフェニル)プロパン[=ビスフェノールA]、2, 2-ビス(4-ヒドロキシ-3, 5-ジメチルフェニル)プロパン、2, 2-ビス(4-ヒドロキシ-3, 5-ジエチルフェニル)プロパン、2, 2-ビス(4-ヒドロキシ-3, 5-ジプロモフェニル)プロパン、2, 2-ビス(4-ヒドロキシ-3, 5-ジフェニル)フェニル)プロパン、2, 2-ビス(4-ヒドロキシ-3, 5-ジブロモフェニル)プロパン、2, 2-ビス(4-ヒドロキシフェニル)ペンタン、2, 4'-ジヒドロキシジフェニルメタン、ビス(4-ヒドロキシフェニル)メタン、ビス(4-ヒドロキシ-5-ニトロフェニル)メタン、1, 1-ビス(4-ヒドロキシフェニル)エタン、3, 3-ビス(4-ヒドロキシフェニル)ペンタン、1, 1-ビス(4-ヒドロキシフェニル)シクロヘキサン、ビス(4-ヒドロキシフェニル)スルホン、2, 4'-ジヒドロキシジフェニルスルホン、ビス(4-ヒドロキシフェニル)スルフィド、4, 4'-ジヒドロキシジフェニルエーテル、4, 4'-ジヒドロキシ-3, 3'-ジクロロジフェニルエーテル、4, 4'-ジヒドロキシ-2, 5-ジエトキシジフェニルエーテルなどが例示される。これらの中でも2, 2-ビス(4-ヒドロキシフェニル)プロパン[=ビスフェノールA]が好ましい。また、これらの芳香族ジヒドロキシ化合物類は1種でも、必要に応じて2種以上を併用して共重合体とすることもできる。

【0023】芳香族ポリカーボネート樹脂(a)の製造に用いられる他方の原料である炭酸結合を導入し得る化合

物としては、ホスゲン、炭酸ジエステル類などが挙げられる。炭酸ジエステル類の具体例としては、ジメチルカーボネート、ジエチルカーボネート、ジ-n-ブチルカーボネート、ジフェニルカーボネート、およびジトリルカーボネートなどの置換ジフェニルカーボネートなどが挙げられる。中でも好ましいのは、ジフェニルカーボネート、置換ジフェニルカーボネートであり、特に好ましいのはジフェニルカーボネートである。これらの炭酸ジエステル類は、1種でも2種以上を併用してもよい。

【0024】また、上記のような炭酸結合を導入し得る化合物と共に、好ましくは50モル%以下、さらに好ましくは30モル%以下の量でジカルボン酸類、またはジカルボン酸エステル類を使用することができる。このようなジカルボン酸類またはジカルボン酸エステル類としては、テレフタル酸、イソフタル酸、テレフタル酸ジフェニル、イソフタル酸ジフェニルなどが挙げられる。このようなカルボン酸類、またはカルボン酸エステル類を炭酸ジエステル類と併用した場合には、ポリエステルカーボネートが得られる。また、末端停止剤として、p-ターシャリーブチルフェノール、クミルフェノールなどのフェノール類、2-メトキシカルボニルフェニルベンゾエート、4-クミル安息香酸-(2'-メトキシカルボニルフェニル)エステル、2-エトキシカルボニルフェニルベンゾエート、4-(o-メトキシカルボニルフェニル)オキシカルボニル安息香酸-(2'-メトキシカルボニルフェニル)エステルなどのエステル類を、必要量使用することができる。

【0025】芳香族ジヒドロキシ化合物類と炭酸ジエステル類との混合比率は、所望の芳香族ポリカーボネート樹脂(a)の分子量と末端水酸基濃度により決められる。芳香族ジヒドロキシ化合物類1モルに対して、炭酸ジエステル類を等モル量以上とするのが一般的であり、好ましくは1.01~1.30モル、特に好ましくは1.01~1.20モルである。

【0026】エステル交換法により芳香族ポリカーボネート樹脂(a)を製造する際には、通常エステル交換触媒が使用される。エステル交換触媒としては特に制限はないが、主としてアルカリ金属化合物類、および/または、アルカリ土類金属化合物類が使用され、これらの触媒は、単独で、または2種以上を組み合わせ使用してもよい。また、助触媒として塩基性ホウ素化合物類、塩基性リン化合物類、塩基性アンモニウム化合物類、またはアミン系化合物類などの塩基性化合物類を併用することもできる。

【0027】アルカリ金属化合物類の具体例としては、リチウム、ナトリウム、カリウム、ルビジウム、セシウムの水酸化物、炭酸水素塩、炭酸塩、酢酸塩、リン酸水素塩、フェニルリン酸塩などの無機アルカリ金属化合物類や、ステアリン酸、安息香酸などの有機酸類、メタノール、エタノールなどのアルコール類、石炭酸、ビスフ

エノールAなどのフェノール類との塩などの有機アルカリ金属化合物類が挙げられる。

【0028】アルカリ土類金属化合物類の具体例としては、ベリリウム、カルシウム、マグネシウム、ストロンチウム、バリウムの水酸化物、炭酸水素塩、炭酸塩、酢酸塩などの無機アルカリ土類金属化合物類や、有機酸類、アルコール類、フェノール類との塩などの有機アルカリ土類金属化合物類などが挙げられる。

【0029】塩基性ホウ素化合物類の具体例としては、テトラメチルホウ素、テトラエチルホウ素、テトラプロピルホウ素、テトラブチルホウ素、トリメチルエチルホウ素、トリメチルベンジルホウ素、トリメチルフェニルホウ素、トリエチルメチルホウ素、トリエチルベンジルホウ素、トリエチルフェニルホウ素、トリブチルベンジルホウ素、トリブチルフェニルホウ素、テトラフェニルホウ素、ベンジルトリフェニルホウ素、メチルトリフェニルホウ素、ブチルトリフェニルホウ素、等のナトリウム塩、カリウム塩、リチウム塩、カルシウム塩、マグネシウム塩、バリウム塩、またはストロンチウム塩などが挙げられる。

【0030】塩基性リン化合物類の具体例としては、トリエチルホスフィン、トリーn-プロピルホスフィン、トリーn-ブチルホスフィン、トリフェニルホスフィン、トリブチルホスフィン、または四級ホスホニウム塩などが挙げられる。

【0031】塩基性アンモニウム化合物類の具体例としては、テトラメチルアンモニウムヒドロキシド、テトラエチルアンモニウムヒドロキシド、テトラプロピルアンモニウムヒドロキシド、テトラブチルアンモニウムヒドロキシド、トリメチルエチルアンモニウムヒドロキシド、トリメチルベンジルアンモニウムヒドロキシド、トリメチルフェニルアンモニウムヒドロキシド、トリエチルメチルアンモニウムヒドロキシド、トリエチルベンジルアンモニウムヒドロキシド、トリエチルフェニルアンモニウムヒドロキシド、トリブチルベンジルアンモニウムヒドロキシド、トリブチルフェニルアンモニウムヒドロキシド、テトラフェニルアンモニウムヒドロキシド、ベンジルトリフェニルアンモニウムヒドロキシド、メチルトリフェニルアンモニウムヒドロキシド、ブチルトリフェニルアンモニウムヒドロキシドなどが挙げられる。

【0032】アミン系化合物類の具体例としては、4-アミノピリジン、2-アミノピリジン、N、N-ジメチル-4-アミノピリジン、4-ジエチルアミノピリジン、2-ヒドロキシピリジン、2-メトキシピリジン、4-メトキシピリジン、2-ジメチルアミノイミダゾール、2-メトキシイミダゾール、イミダゾール、2-メルカプトイミダゾール、2-メチルイミダゾール、アミノキノリンなどが挙げられる。

【0033】これらエステル交換触媒のうち、実用的にはアルカリ金属化合物類、塩基性アンモニウム化合物

類、塩基性リン化合物類が望ましく、特にアルカリ金属化合物類が好ましい。

【0034】触媒の使用量は、芳香族ジヒドロキシ化合物類1モルに対して、 $1 \times 10^{-9} \sim 1 \times 10^{-3}$ モルの範囲で選ぶことができる。特にアルカリ金属化合物類、アルカリ土類化合物類では、通常は芳香族ジヒドロキシ化合物類1モルに対して $1 \times 10^{-9} \sim 1 \times 10^{-4}$ モル、好ましくは $1 \times 10^{-8} \sim 1 \times 10^{-5}$ モルの範囲で選ばれる。塩基性ホウ素化合物類、塩基性リン化合物類、塩基性アンモニウム化合物類またはアミン系化合物類などの塩基性化合物類では、芳香族ジヒドロキシ化合物類1モルに対して $1 \times 10^{-9} \sim 1 \times 10^{-3}$ モル、好ましくは $1 \times 10^{-7} \sim 1 \times 10^{-4}$ モルの範囲で選ばれる。

【0035】触媒量が上記範囲より少ない場合には、所定の分子量、所望の末端水酸基量を有する芳香族ポリカーボネート樹脂(a)を製造するのに必要な重合活性が得られず、上記範囲より多い場合は、後記する環状オリゴマー量の増加、ポリマー色調の悪化、耐熱性の低下、耐加水分解性の低下や、ゲルの発生による異物量が増大するなど、好ましくない。

【0036】芳香族ポリカーボネート樹脂(a)の分子量は、粘度平均分子量で20,000~50,000の範囲が好ましい。20,000未満では芳香族ポリカーボネート樹脂の機械的強度さらにはレンズ成形品の耐衝撃性が低下するため、好ましくない。また、50,000以上では熔融粘度が高くなり過ぎて成形性に問題がある。上記範囲で好ましくは20,000~40,000であり、中でも特に好ましくは21,000~30,000である。なお、本発明において粘度平均分子量(M<sub>v</sub>)とは、塩化メチレンを溶媒とし、ウペローデ粘度計によって25℃の温度で極限粘度[η]を測定し、次式、すなわち、

$[\eta] = 1.23 \times 10^{-4} \times (M_v)^{0.83}$ 、により算出した。

【0037】芳香族ポリカーボネート樹脂(a)の末端水酸基濃度は、300~2,000ppmの範囲が好ましく、さらに好ましくは350~1000ppm、特に好ましくは400~800ppmの範囲である。

【0038】本発明において芳香族ポリカーボネート樹脂(a)の末端水酸基濃度(ppm)は、Makromol.Chem. 88 215(1965)に記載されている四塩化チタンと酢酸を用いる比色定量法により測定することができ、ビスフェノールAを基準物質として次式、すなわち、末端水酸基濃度(ppm)=芳香族ポリカーボネート樹脂中の末端水酸基量(μmol/g)×17、で算出することができる。

【0039】上記の特性を有する芳香族ポリカーボネート樹脂(a)は、前記芳香族ジヒドロキシ化合物類と、前記炭酸結合を導入し得る化合物類とを選び、通常は上記エステル交換触媒を使用して製造される。エステル交換

反応を行う際には、140～320℃の温度範囲、圧力は常圧または減圧が選ばれ、芳香族ヒドロキシ化合物などの副生成物を除去しながら、熔融重縮合反応を行う方法が挙げられる。

【0040】熔融重縮合反応は、バッチ式または連続的に行うことができるが、製品の安定性などの観点から連続式で行うことが好ましい。反応は通常、温度、圧力条件を変化させた2段以上の多段工程で行われる。各段階の反応温度は、上記範囲内で反応生成物が熔融状態にあれば特に制限はなく、また反応時間は、反応の進行の程度により適宜定められるが、0.1～10時間で選ばれる。具体的には、第1段目の反応は常圧または減圧下で、温度は140～260℃、好ましくは180～240℃で、反応時間は0.1～5時間、好ましくは0.5～3時間反応させる。ついで反応系の減圧度を上げながら反応温度を高め、最終的には2mmHg以下の減圧下、240～320℃の温度で重縮合反応を行う。

【0041】熔融重縮合反応を行う装置には特に制限がなく、槽型、管型または塔型のいずれの型式であってもよく、各種の攪拌翼を備えた釜型重合槽、横型1軸攪拌翼型または横型2軸攪拌翼型などの重合槽を使用することができる。熔融重縮合反応中の雰囲気は特に制限はないが、反応生成物の品質の観点から、窒素ガスなどの不活性ガス存在下または減圧下で行うのが好ましい。

【0042】熔融重縮合反応終了後、製造された芳香族ポリカーボネート樹脂は通常、ペレットとして回収されるが、その際、生成した芳香族ポリカーボネート樹脂中に残存するモノマーや副生物などの低分子量成分を除去するために、バント式押出機で熔融混練しつつ強制的に揮発させて除去できる。芳香族ポリカーボネート樹脂(a)中の残存モノマーとしては、芳香族ジヒドロキシ化合物類、炭酸ジエステル類、これらの重縮合反応時の副生物および末端停止剤であるものモノヒドロキシ化合物類が挙げられる。

【0043】芳香族ポリカーボネート樹脂(a)中に含まれるこれら残存モノマーは、合計量を500ppm以下とする。残存モノマーが500ppmを越えると、接合部の接着強度が低下するので好ましくない。芳香族ポリカーボネート樹脂(a)中の残存モノマー量は、300ppm以下がより好ましい。さらに、各残存モノマーの残存量としては、モノヒドロキシ化合物類が100ppm以下、芳香族ジヒドロキシ化合物類が100ppm以下、炭酸ジエステル類が300ppm以下であると、さらに好ましい。

【0044】熔融重縮合を行う際に触媒、特にアルカリ金属化合物類触媒を用いた場合には、エステル交換法ポリカーボネート中の残存触媒を、失活剤によって中和するのが好ましい。残存触媒を中和する失活剤としては、例えばイオウ含有酸性化合物類またはそれより形成される誘導体類が挙げられる。失活剤の使用量は、触媒のアルカリ金属化合物類の量に対して0.5～10当量の範

囲が好ましく、特に好ましくは1～5当量の範囲である。生成する芳香族ポリカーボネート樹脂を基準とする場合には、通常1～100ppmの範囲であり、特に好ましくは1～20ppmである。

【0045】イオウ含有酸性化合物類またはそれより形成される誘導体類の例としては、スルホン酸、スルフィン酸、硫酸またはそれらのエステル類であり、具体的にはジメチル硫酸、ジエチル硫酸、p-トルエンスルホン酸、そのメチル、エチル、ブチル、オクチルおよびフェニルエステル類、ベンゼンスルホン酸、そのメチル、エチル、ブチル、オクチル、フェニルおよびドデシルエステル類、ベンゼンスルフィン酸、トルエンスルフィン酸、ナフタレンスルホン酸などが挙げられる。これらの化合物のうち、p-トルエンスルホン酸のエステルまたはベンゼンスルホン酸のエステル類が好ましく、これらの化合物は1種でも2種以上を併用することもできる。

【0046】上記失活剤を生成した芳香族ポリカーボネート樹脂(a)へ添加する方法は、特に限定されるものではなく、従来から知られている方法によることができる。例えば、上記の失活剤を直接または希釈剤で希釈して、熔融または固体状態にある生成した芳香族ポリカーボネート樹脂に添加し、混合する方法によることができる。具体的には重縮合反応器、反応器からの樹脂移送ライン、または押出機で熔融混練する際のいずれかで失活剤を添加することにより、芳香族ポリカーボネート樹脂に混合することができる。また、ミキサーなどで芳香族ポリカーボネート樹脂のペレット、フレーク、粉末などに失活剤を混合した後、押出機によって熔融混練する方法であってもよい。

【0047】なお、本発明においては、ポリカーボネートに紫外線吸収剤、離型剤、着色剤等の各種添加剤を配合することもでき、ポリカーボネートの製造途中、又はペレット製造の前にこれらの添加剤を添加する場合もあり、一般にそれらの添加剤を含んだものを「ポリカーボネート」と称する場合があるが、本発明で規定する上記関係式の値は、これらの添加剤を全く含まないポリカーボネートについて求められるものである。

【0048】本発明に用いられる紫外線吸収剤(b)は、ベンゾトリアゾール構造を有し、最大吸収波長が350nm以上である紫外線吸収剤が使用される。このようなベンゾトリアゾール系紫外線吸収剤としては、具体的には、2-[5-クロロ(2H)-ベンゾトリアゾール-2-イル]-4-メチル-6-(tert-ブチル)フェノール及び2,4-ジ-tert-ブチル-6-(5-クロロベンゾトリアゾール)-2-イル)フェノールが挙げられる。

【0049】上記の紫外線吸収剤に加えて、さらにその他の紫外線吸収剤を併用することができる。その他の紫外線吸収剤としては、ベンゾフェノン系、サリチル酸フェニル系、ヒンダードアミン系等が挙げられる。ベン



ゾフェノン系紫外線吸収剤としては、2, 4-ジヒドロキシーベンゾフェノン、2-ヒドロキシー-4-メトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシー-4-n-オクトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシー-4-ドデシロキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシー-4-オクタデシロキシベンゾフェノン、2, 2'-ジヒドロキシー-4-メトキシベンゾフェノン、2, 2'-ジヒドロキシー-4, 4'-ジメトキシベンゾフェノン、2, 2', 4, 4'-テトラヒドロキシーベンゾフェノン等が挙げられる。

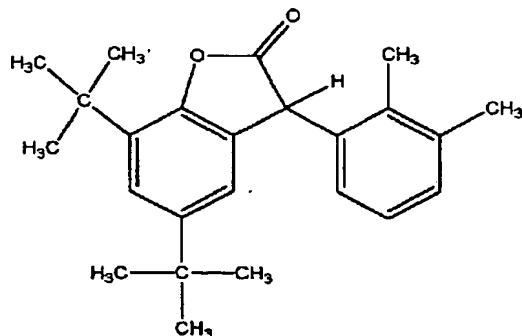
【0050】サリチル酸フェニル系紫外線吸収剤としては、フェニルサルチレート、2, 4-ジターシャリーブチルフェニル-3, 5-ジターシャリーブチル-4-ヒドロキシベンゾエート等が挙げられる。ヒンダードフェノール系紫外線吸収剤としては、ビス(2, 2, 6, 6-テトラメチルピペリジン-4-イル)セバケート等が挙げられる。

【0051】上記の他に、最大吸収波長が350nm以下のベンゾトリアゾール系紫外線吸収剤も併用することができる。

【0052】紫外線吸収剤としては、上記以外に紫外線の保有するエネルギーを、分子内で振動エネルギーに変換し、その振動エネルギーを、熱エネルギー等として放出する機能を有する化合物が含まれる。さらに、酸化防止剤あるいは着色剤等との併用で効果を発現するもの、あるいはクエンチャーと呼ばれる、光エネルギー変換的に作用する光安定剤等も併用することができる。

【0053】本発明に用いられる紫外線吸収剤(b)の配合量は、芳香族ポリカーボネート樹脂(a)100重量部に対し、0.1~1重量部であり、好ましくは0.15~0.8重量部、さらに好ましくは0.2~0.6重量部である。紫外線吸収剤の配合量が0.1重量部より少ない場合には、紫外線吸収剤の効果として不十分であり、一方、1重量部を超える量を添加しても、本発明の目的とする組成物としての改良効果は見られない。

【0054】本発明におけるベンゾフラノ-2-オン型\*

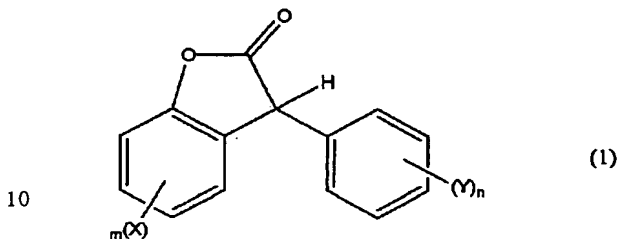


【0059】上記ベンゾフラノ-2-オン型化合物はチバ・スペシャリティー・ケミカルズ社から商品名「HP-136」として市販されている。これらのベンゾフラノ-2-オン型化合物は、通常はリン系安定剤及びフェ

\* 化合物(c)は、下記一般式(1)に示される構造を有する化合物である。

【0055】

【化11】

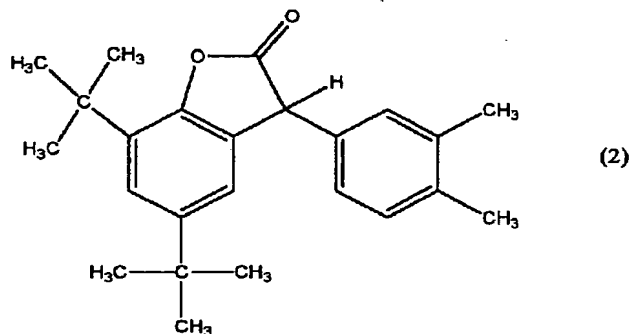


(式中、mは0~4、nは0~5の整数であり、X、Yは酸素原子、窒素原子、硫黄原子のいずれか1種または2種以上を含んでいてもよい、炭素数1~18の脂肪族炭化水素基、脂環族炭化水素基または芳香族炭化水素基を表し、X、Yは同一であっても異なってもよい)

【0056】上記のベンゾフラノ-2-オン型化合物は、ポリマー中のアルキルラジカルを捕捉し、自動酸化反応を抑制する効果を有しており、かつ、成形加工時に黄変を抑える効果を持つ特殊な安定剤である。好ましくは下記構造式(2)または(3)で表される化合物、またはそれらの混合物である。

【0057】

【化12】



【0058】

【化13】

(3)

ノール系抗酸化剤と併用して用いることにより、大幅な加工安定性を改善することができる。リン系安定剤及びフェノール系抗酸化剤との併用品としては、チバ・スペシャリティー・ケミカルズ社から商品名「イルガノック

スHP2215」、「イルガノックスHP2225」、「イルガノックスHP2251」、「イルガノックスHP2921」、および「イルガノックスHP2411」等として市販されており、容易に入手することができる。

【0060】本発明において、ベンゾフラノ-2-オン型化合物(c)の配合量は、芳香族ポリカーボネート樹脂(a)100重量部に対して、0.003~1重量部であり、好ましくは0.005~0.5重量部が好ましく、さらに好ましくは0.007~0.1重量部である。0.003重量部より少ない場合には、安定剤としての効果が不十分であり、1重量部を越えた量を添加しても、それ以上の安定剤としての効果は得られない。

【0061】本発明に用いられる亜リン酸エステル系安定剤(d)(以下、単に「リン系安定剤」ということがある)としては、種々のものが使用されるが、耐加水分解性が要求される組成物については、ペンタエリスリトール構造を有する亜リン酸エステル系安定剤の使用は、プレッシャークッカー試験(120℃, 100%RH, 5hr)後に、成形品が白濁する場合がありますが好ましくない。本発明において用いられる亜リン酸エステル系安定剤(d)としては、下記一般式(4)および/または(5)で示される亜リン酸エステル系安定剤が好ましい。

【0062】

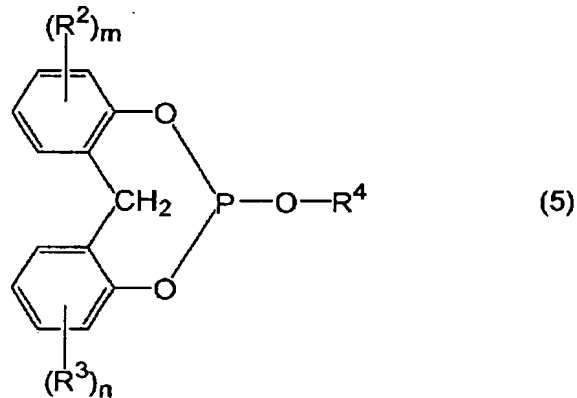
【化14】



(R<sup>1</sup>は、置換基を有してもよい炭素数1~20の脂肪族炭化水素基、脂環族炭化水素基、または芳香族炭化水素基を表す)

【0063】

【化15】



(R<sup>2</sup>~R<sup>4</sup>は、それぞれ置換基を有してもよい炭素数1~20の脂肪族炭化水素基、脂環族炭化水素基、または芳香族炭化水素基を表し、m及びnは、それぞれ0~4の整数を表す。)

上記の式においてR<sup>1</sup>、およびR<sup>2</sup>~R<sup>4</sup>で示される基としては、それぞれ例えば、炭素数1~20のアルキル

基、シクロアルキル基等の脂肪族炭化水素基またはフェニル基等の芳香族炭化水素基が好ましい。また、これらの基はヒドロシル基等の置換基で置換されていてもよい。

【0064】上記一般式(4)または(5)の構造を有する亜リン酸エステル系安定剤としては、具体的には、例えば、トリス(ノニルフェニル)ホスファイト、トリフェニルホスファイト、トリス(2,4-ジ-tert-ブチルフェニル)ホスファイト、2,2-メチレンビス(4,6-ジ-tert-ブチルフェニル)オクチルホスファイト、トリス(エチルフェニル)ホスファイト、トリス(ブチルフェニル)ホスファイト及びトリス(ヒドロキシフェニル)ホスファイトなどが挙げられる。これらのうち、トリス(2,4-ジ-tert-ブチルフェニル)ホスファイト、2,2-メチレンビス(4,6-ジ-tert-ブチルフェニル)オクチルホスファイトが好ましい。

【0065】本発明において、亜リン酸エステル系安定剤(c)の配合量としては、芳香族ポリカーボネート樹脂(a)100重量部に対して0.01~2重量部である。配合量が0.01重量部より少ないと、安定剤としての効果が不十分であり、一方、2重量部を超えて添加してもそれ以上の安定剤としての効果は得られない。亜リン酸エステル系安定剤の配合量は0.02~1重量部が好ましい。

【0066】上記リン系安定剤を用いることで耐候性、耐衝撃性、透明性、色調安定性、に優れたポリカーボネート樹脂組成物が得られるが、このリン系安定剤に加えて、以下のフェノール系抗酸化剤を配合することにより、さらなる耐候性、色調安定性が優れたポリカーボネート樹脂組成物を得ることができる。

【0067】本発明におけるフェノール系抗酸化剤

(e)としては、特に制限はないがヒンダードフェノール系が好適に用いられる。代表的な例としてはペンタエリスリトールテトラキス[3-(3,5-ジ-tert-ブチル-4-ヒドロキシフェニル)プロピオネート]、オクタデシル-3-(3,5-ジ-tert-ブチル-4-ヒドロキシフェニル)プロピオネート、チオジェチレンビス[3-(3,5-ジ-tert-ブチル-4-ヒドロキシフェニル)プロピオネート]、N,N'-ヘキサ-1,6-ジイルビス[3-(3,5-ジ-tert-ブチル-4-ヒドロキシフェニル)プロピオナミド]、2,4-ジメチル-6-(1-メチルペンタデシル)フェノール、ジエチル[3,5-ビス(1,1-ジメチルエチル)-4-ヒドロキシフェニル]メチル]ホスファエート、3,3',3'',5,5',5''-ヘキサ-tert-ブチル-a,a',a''-(メシチレン-2,4,6-トリイル)トリ-p-クレゾール、4,6-ビス(オクチルチオメチル)-o-クレゾール、エチレンビス(オキシエチレン)ビス[3-

(5-tert-ブチル-4-ヒドロキシ-m-トリル)プロピオネート]、ヘキサメチレンビス〔3-(3,5-ジ-tert-ブチル-4-ヒドロキシフェニル)プロピオネート、1,3,5-トリス(3,5-ジ-tert-ブチル-4-ヒドロキシベンジル)-1,3,5-トリアジン-2,4,6(1H,3H,5H)-トリオン、2,6-ジ-tert-ブチル-4-(4,6-ビス(オクチルチオ))-1,3,5-トリアジン-2-イルアミノ)フェノール等が挙げられる。上記のうちで、特にペンタエリスリトールテトラキス〔3-(3,5-ジ-tert-ブチル-4-ヒドロキシフェニル)プロピオネート]、オクタデシル-3-(3,5-ジ-tert-ブチル-4-ヒドロキシフェニル)プロピオネートが好ましい。これらのフェノール系抗酸化剤は、チバ・スペシャルティ・ケミカルズ社より商品名「イルガノックス1010」及び「イルガノックス1076」として市販されており、容易に入手することができる。

【0068】上記フェノール系抗酸化剤(d)の配合量としては、(a)芳香族ポリカーボネート樹脂100重量部に対して0.01~2重量部である。配合量が0.01重量部より少ない場合には、抗酸化剤としての効果が不十分であり、一方2重量部を超えて添加してもそれ以上の抗酸化剤としての効果は得られない。フェノール系抗酸化剤の配合量は0.02~1重量部が好ましい。

【0069】本発明に用いられる離型剤(f)は、脂肪族カルボン酸、脂肪族カルボン酸エステル、数平均分子量200~15000の脂肪族炭化水素化合物、ポリシロキサン系シリコンオイルから選ばれた少なくとも1種の化合物である。これらの中で、脂肪族カルボン酸、脂肪族カルボン酸エステルから選ばれた少なくとも1種が好ましく、脂肪族カルボン酸エステル、中でも飽和脂肪族カルボン酸エステルが特に好ましく用いられる。

【0070】脂肪族カルボン酸としては、飽和又は不飽和の脂肪族モノカルボン酸、ジカルボン酸又はトリカルボン酸を挙げることができる。ここで脂肪族カルボン酸は、脂環式カルボン酸も包含する。このうち好ましい脂肪族カルボン酸は、炭素数6~36のモノ又はジカルボン酸であり、炭素数6~36の脂肪族飽和モノカルボン酸がさらに好ましい。このような脂肪族カルボン酸の具体例としては、パルミチン酸、ステアリン酸、吉草酸、カプロン酸、カプリン酸、ラウリン酸、アラキン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸、セロチン酸、メリシン酸、テトラトリアコンタン酸、モンタン酸、グルタル酸、アジピン酸、アゼライン酸等を挙げることができる。

【0071】脂肪族カルボン酸エステルを構成する脂肪族カルボン酸成分としては、前記脂肪族カルボン酸と同じものが使用できる。一方、脂肪族カルボン酸エステルを構成するアルコール成分としては、飽和又は不飽和の1価アルコール、飽和又は不飽和の多価アルコール等を

挙げるができる。これらのアルコールは、フッ素原子、アリール基等の置換基を有していてもよい。これらのアルコールのうち、炭素数30以下の1価又は多価の飽和アルコールが好ましく、さらに炭素数30以下の脂肪族飽和1価アルコール又は多価アルコールが好ましい。ここで脂肪族アルコールは、脂環式アルコールも包含する。これらのアルコールの具体例としては、オクタノール、デカノール、ドデカノール、ステアシルアルコール、ベヘニルアルコール、エチレングリコール、ジエチレングリコール、グリセリン、ペンタエリスリトール、2,2-ジヒドロキシペルフルオロプロパノール、ネオペンチレングリコール、ジトリメチロールプロパン、ジペンタエリスリトール等を挙げることができる。これらの脂肪族カルボン酸エステルは、不純物として脂肪族カルボン酸及び/又はアルコールを含有していてもよく、複数の化合物の混合物であってもよい。

【0072】脂肪族カルボン酸エステルの具体例としては、蜜ロウ(ミリシルパルミテートを主成分とする混合物)、ステアリン酸ステアシル、ベヘン酸ベヘニル、ベヘン酸オクチルドデシル、グリセリンモノパルミテート、グリセリンモノステアレート、グリセリンジステアレート、グリセリントリスステアレート、ペンタエリスリトールモノパルミテート、ペンタエリスリトールモノステアレート、ペンタエリスリトールジステアレート、ペンタエリスリトールトリスステアレート、ペンタエリスリトールテトラステアレートを挙げることができる。特に好ましいのはステアリン酸ステアシル、ベヘン酸ベヘニルである。

【0073】該離型剤の配合量は、芳香族ポリカーボネート樹脂100重量部に対して0.01~1重量部であり、好ましくは0.03~0.5重量部である。1重量部を超えると耐加水分解性の低下、射出成形時の金型汚染等の虞があり、0.01重量部より少ないと離型不良を起こし易い。該離型剤は1種でも使用可能であるが、複数併用して使用することもできる。

【0074】本発明の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物の製造方法としては、特に制限はなく、例えば、

(a)芳香族ポリカーボネート樹脂、(b)紫外線吸収剤、(c)ベンゾフラノ-2-オン型化合物、(d)亜リン酸エステル系安定剤、および(e)フェノール系抗酸化剤、さらに必要に応じて(f)離型剤を一括熔融混練する方法、あるいは(a)芳香族ポリカーボネート樹脂、(b)紫外線吸収剤、(d)亜リン酸エステル系安定剤を予め混練後、(c)ベンゾフラノ-2-オン型化合物(e)フェノール系抗酸化剤、さらに必要に応じて(f)離型剤を配合し、熔融混練する方法などが挙げられる。

【0075】本発明の芳香族ポリカーボネート樹脂組成物には、上記の(a)~(f)の成分の他に、芳香族ポリカーボネート樹脂に通常添加されるそれ自体公知の顔

料、染料などの添加剤を適宜配合することができる。

【0076】

【実施例】以下、本発明を実施例により更に詳細に説明するが、本発明はその要旨を越えない限り、以下の実施例に限定されるものではない。なお、ポリカーボネート以外の原材料と樹脂組成物試験方法を次に示す。

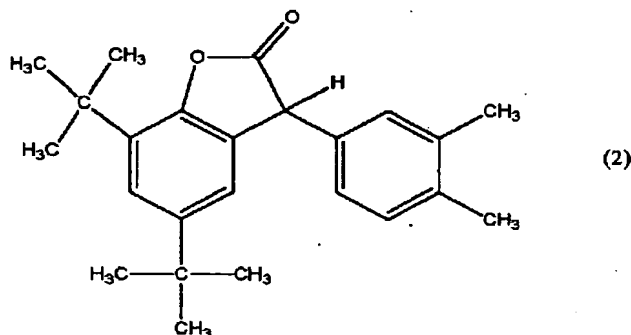
【0077】(1) 紫外線吸収剤-1: 2-[5-クロロ(2H)-ベンゾトリアゾール-2-イル] 4-メチル-6-tert-ブチルフェノール (最大吸収波長: 353 nm)

(2) 紫外線吸収剤-2: 2-(2H-ベンゾトリアゾール-2-イル)-4-(1, 1, 3, 3, -テトラメチルブチル) フェノール (最大吸収波長: 343 nm)

【0078】(3) ベンゾフラノ-2-オン型化合物: 下記構造式(2)で表される化合物、商品名: HP-136、チバ・スペシャリティ・ケミカルズ社製

【0079】

【化16】



【0080】(4) リン系安定剤-1: トリス(2, 4-ジ-tert-ブチルフェニル) ホスファイト

(5) リン系安定剤-2: 2, 2-メチレンビス(4, 6-ジ-tert-ブチルフェニル) オクチルホスファイト

【0081】(6) フェノール系抗酸化剤: ペンタエリスリトールテトラキス[3-(3, 5-ジ-tert-ブチル-4-ヒドロキシフェニル) プロピオネート]、商品名: IRGANOX 1010、チバ・スペシャリティ・ケミカルズ (株) 製

【0082】(7) 離型剤-1: ステアリン酸ステアリル

(8) 離型剤-2: ベヘン酸ベヘニル

【0083】なお、試験片の物性評価は次に記載のように行った。

【0084】(A) 紫外線吸収剤の最大吸収波長: 紫外線吸収剤をトルエンに溶解し、分光光度計UV-3100PC (株) 島津製作所を用いて、JIS-K7361に準拠して測定した。

【0085】(B) 初期黄変度(YI): 日本製鋼所製J-50EP成形機を用いて厚さ3mmのプレートを290℃で通常成形した。成形品(プレート)について分

光式色彩計SE-2000 (日本電色工業(株)製)で測定した。

【0086】(C) 滞留成形後のΔE, ΔYI: 日本製鋼所製J-50EP成形機を用いて320℃-10分サイクルで3mmのプレートを成形し、最初の1ショット目と7.ショット目の色相を分光式色彩計SE-2000を用いて測定し、ΔE, ΔYIを求めた。

【0087】(D) UVカット波長: 日本製鋼所製J-50EP成形機を用いて厚さ3mmのプレートを成形し、この成形品(プレート)を用いて分光光度計UV-3100PC (株) 島津製作所を用いて、JIS-K7361に準拠して測定した。

【0088】(E) 耐加水分解性: 厚さ3mmの成形品(プレート)を用い、プレッシャーコッカー試験(120℃、RH100%、5hr)を行い、試験前後の曇り度合いを評価した。

○: 試験後プレートは白濁せず。×: 試験後プレートは白濁した。

【0089】(F) メガネレンズの耐衝撃試験: 金型で厚さ2mmのメガネレンズを成形し、落球衝撃試験(直径6cm、重さ1.05kgの鉄球を1.8mの高さから落下させる方法)を行った。

○: 落球衝撃試験で割れず。×: 落球衝撃試験で割れ発生。

【0090】(G) ポリカーボネートの粘度平均分子量(Mv): ウベローデ粘度計を用いて、塩化メチレン中25℃の極限粘度[η]を測定し、以下の式より粘度平均分子量(Mv)を求めた。

$$[\eta] = 1.23 \times 10^{-4} \times (Mv)^{0.83}$$

【0091】(H) 光線透過率: 日本製鋼所製J-50EP成形機を用いて厚さ3mmのプレートを成形し、この成形品(プレート)を用いて分光光度計UV-3100PC (株) 島津製作所を用いて、JIS-K7361に準拠して測定した。

【0092】(I) ポリカーボネートの末端OH基含有量: 四塩化チタン/酢酸法(Makromol. Chem. 88 215 (1965)に記載の方法)により比色定量を行った。測定値は、ポリカーボネート重量に対する末端OH基の重量をppm単位で表示した。

【0093】(J) 残留モノマー量: カラムにWaters社製のμ-Bondersphereを使用し、溶媒としてアセトニトリルと酢酸水との混合液を使用し、UV検出器を備えた高速液体クロマトグラフによって測定した。

【0094】参考例(芳香族ポリカーボネート樹脂の製造)

ビスフェノールAとジフェニルカーボネートとを原料とし、エステル交換触媒として炭酸セシウムをビスフェノールA1モルに対して0.5×10<sup>-6</sup>モル添加して、エステル交換反応を行い、末端水酸基濃度とモノマー残留量の異なる3種類の芳香族ポリカーボネート樹脂(P

C-1、PC-2、PC-3)を製造した。得られた3種類の芳香族ポリカーボネート樹脂が熔融状態にある間に、パラトルエンスルホン酸ブチル(失活剤)を5ppm添加した後、押出機で混練してペレット化した。

【0095】得られた3種類の芳香族ポリカーボネート\*

\*樹脂(PC-1、PC-2)と、比較例に使用した芳香族ポリカーボネート樹脂(PC-3)についての分析値を表1に示す。

【0096】

【表1】

	粘度平均 分子量 (Mv)	末端水酸基 濃度(ppm)	残留モノマー量(ppm)		
			モノヒドロキシ 化合物	炭酸ジエステル	芳香族モノヒドロキシ 化合物
PC-1	22000	440	58	223	24
PC-2	22000	790	51	141	82
PC-3	22000	580	116	418	93

【0097】実施例1~7、比較例1~4

表2、表3に示す配合処方、原料を秤量しランブラーにて20分混合後、40mm単軸押出機にてシリンダー温度290℃でペレット化し、射出成形機にて、シリンダー温度290℃にて3mm厚プレートを通常成形及び※

※10分間320℃で滞留させて成形し、耐候性及び黄変度进行评估した。またメガネレンズの耐衝撃試験を行った。評価結果を表2および表3に示す。

【0098】

【表2】

	単位	実施例 1	実施例 2	実施例 3	実施例 4	実施例 5	実施例 6	実施例 7
PC-1	重量部	100	—	100	—	100	100	100
PC-2		—	100	—	100	—	—	—
紫外線吸収剤-1		0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4
ベンゾフラゾン型化合物		0.015	0.015	0.015	0.015	0.015	0.015	0.03
リン系安定剤-1		0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.06
リン系安定剤-2		—	—	—	—	0.03	—	—
フェノール系抗酸化剤		0.06	0.06	0.06	0.06	0.06	0.06	0.12
離型剤-1		—	—	0.2	0.2	—	—	0.2
離型剤-2	nm	—	—	—	—	—	0.2	—
紫外線吸収剤最大吸収波長		353	353	353	353	353	353	353
初期 YI 値		5.6	5.6	5.7	5.7	5.6	5.7	5.1
320℃滞留成形(3mm厚)								
ΔE		0.8	0.7	0.6	0.6	0.7	0.6	0.7
ΔYI		1.3	1.2	1.0	1.0	1.2	1.1	1.2
UVカット波長(3mm厚)		400	400	400	400	400	400	400
400nmでの光線透過率 (3mm厚)		1%	1%	1%	1%	1%	1%	1%
耐加水分解性		○	○	○	○	○	○	○
メガネレンズの耐衝撃性		○	○	○	○	○	○	○

【0099】

【表3】

	単位	比較例 1	比較例 2	比較例 3	比較例 4
PC-1	重量部	—	—	100	100
PC-3		100	100	—	—
紫外線吸収剤-1		0.4	0.4	0.4	—
紫外線吸収剤-2		—	—	—	0.4
ベンゾフラゾン型化合物		0.015	0.015	—	0.015
リン系安定剤-1		0.03	0.03	0.03	0.03
フェノール系抗酸化剤		0.06	0.06	0.06	0.06
離型剤-1		—	0.2	—	—
紫外線吸収剤最大波長	nm	353	353	353	343
初期 YI 値		6.3	6.4	5.7	2.2
320℃滞留成形(3mm厚)					
ΔE		1.2	1.2	1.0	0.8
ΔYI		2.0	2.0	1.8	1.4
UVカット波長(3mm厚)	nm	376	378	376	376
400nmでの光線透過率 (3mm厚)	%	1%	1%	1%	50%
耐加水分解性		○	○	×	○
メガネレンズの耐衝撃性		×	×	○	○

【0100】

【発明の効果】本発明の芳香族ポリカーボネート樹脂組 50

成物は、紫外線吸収能及び耐候性、金型汚染性、耐加水分解性に優れ、耐衝撃性、耐熱性、色調安定性、透明性

に優れており、特にメガネレンズ用途等に極めて有用で\* \* ある。

フロントページの続き

(51) Int. Cl. <sup>7</sup>	識別記号	F I	ターマコード <sup>7</sup> (参考)
C 0 8 K	5/3475	C 0 8 K	5/3475
	5/524		5/524
G 0 2 C	7/02	G 0 2 C	7/02
(72) 発明者 山崎 俊彦		※ (72) 発明者 西林 豊	
神奈川県平塚市東八幡 5 丁目 6 番 2 号 三		神奈川県平塚市東八幡 5 丁目 6 番 2 号 三	
菱エンジニアリングプラスチック株式会		菱エンジニアリングプラスチック株式会	
社技術センター内		社技術センター内	
※		F ターム (参考) 4F071 AA50 AA81 AC11 AC15 AC19	
		AE05 AF02 AF30 AF45 AF57	
		BA01 BB05 BC07	
		4J002 CG011 CG021 EJ068 EL079	
		EU176 EW067 FD037 FD056	
		FD078 FD209 GP01	